

ウイグルにおける生と死ー子ども期を中心にー

Life and death in the Uyghur -A preliminary report on Uyghur life stage-

藤山正二郎

Fujiyama Shojiro

1. Introduction

2. Japanese idea of childhood

3. Han Chinese idea of childhood, contemporary situation of Chinese children

4. Uyghur: folk theory of life stage, child-rearing patterns in traditional Muslim

society, birth rituals, agricultural production, family and kinship, circumcision,

school, gender, marriage ceremony, funeral ceremony, inheritance, aged.

1、はじめに

最近、14才の中学生による残酷な殺人事件が起きた。かなり衝撃的な事件だったため、日本の社会に大きな影響を与え、学校制度、教育など子どもを取り巻く状況について多方面で議論を呼んだ。そのなかで罪もない小学生をこのような残酷な方法で殺しておきながら、現在の日本の少年法ではその罪を裁くことはできないのはおかしいと、少年法を改正すべきだという議論が起きた。たしかに欧米の少年犯罪にくらべると、日本では教育更生に重点を置いて、処罰は緩やかである。

どの年齢で子どもと大人を区切るかは、文化や歴史によって異なるので一概には言えない。アリエスの「子どもの発見」以来、子どもが歴史的に形成される存在であることが定説になった。このことを念頭において、ウイグルの子どもをめぐる文化・社会環境を日本、中国との比較において描いてみたい。ウイグルの調査は中途であり、この報告も中間的なものであることを断っておきたい。

2、日本

日本では江戸時代中期（18世紀）が子どもの観念が生まれた時期ともいわれている。このころから、5月5日の端午の節句や3月3日の雛祭りなどの子どもの年中行事が定着していった。また、玩具や子どもの本、教育書、育児書の刊行が盛ん

になり、子どもに対する考え方がこの時代に変化している。子どもは単に「大人が小さい」というだけではなく、「大人とは違う」存在であり、教育やしつけによって優れた存在に成長していくという考え方が出てきた。その反面、幼児殺し、子捨てなど、大人が生存するために子どもは犠牲にならなければならなかった。江戸時代の300年間（17—19世紀）にはほぼ3000万人と人口に変動がなかったのは、間引き（幼児殺し）と呼ばれる人口調節が行われていたからである。¹

さて少年法に戻ると、世界的な流れを受け、1922年に旧少年法が制定され、18才未満が対象となった。戦後には少年の年齢は20才に引き上げられた。現在の日本の子どもの状況は、死亡率は世界的に見て最低に近く、自殺率も低い、教育制度も整っていて、捨てられることもなく、労働力として使われることもない。このように客観的に見ると、すばらしい環境にありながら、なぜ少年犯罪やいじめなどの問題が起きるのだろうか。少年法改正に見られるように、少年の年齢区分が時代に合わなくなっているのだろうか。

日本の子育ては「甘い」といわれてきた。親と一緒に入浴する、同じ部屋に寝る、おんぶする、抱いて排泄させる、など身体的接触が多い。学校においても生徒への教育は言い聞かせること、「先生を悲しませないでくれ」など、先生と生徒との信頼関係を基礎においた情緒的なものである。ある意味ではこの情緒性が体罰につながる。アメリカの小学校ではルールを守ることが前提であり、それを破ると校長室に行って面接する罰がある。言い聞かせることはしない、体罰もない。普遍的なルールだけがある。²

つまり日本の教育は具体的な人間関係にたよっており、先生と生徒の情緒的な信頼関係が重要視される。普遍的なルールや教師像は浮かんでこない。地域社会などの共同性が安定していれば、それなりの規範はあるが、社会変動によって人間が移動する時代では、その規範はゆらぎやすい。地域社会の崩壊以来、日本の教育は外圧的な管理以外の規範を見出してはいない。

3、中国

中国では子どもの保護の法律は1991年に、誕生から18才までの法的問題を扱う初めての法律として制定された。この法律によると、子どもは中国の人口の3分の1の約4億人である。同年に、子どもの権利条約も批准され、「1990年

代の中国における子どもの開発計画」も制定され、目標を出産時死亡（妊産婦死亡率、1980—92。中国95、日本11：出生10万人当たり）を半分に、1才未満死亡率（1993、中国35、日本4：出生1000人当たり）、5才未満死亡率（1993、中国43、日本6：出生1000人当たり）を3分の1に、5才未満による栄養不良による死亡を半分に減少させ、農村地帯に安全な水と衛生を実現し、完全な初等義務教育を実現させ、中等教育を発展させ、成人非識字者（1990、男性／女性、中国13／32、日本0／1：%）を無くし、子どもの保護に関する情報を国民に知らせ、遊びや課外活動を促進することを目的にしている。また、少数民族や障害を持つ子どもには特別の配慮をしている。だが、子どもを捨てること、男子優先のためアンバランスな男女出生率、児童労働、ストリートチルドレンなど、子どもにとってのつらい状況はまだ存在する。³

古代中国では「物としての子ども」、「労働力としての子ども」、「心としての子ども」があった。「心としての子ども」は祖先崇拝に関係している。子孫を生み、その子孫によって祖先を祭り、再生を行うこと、その行為全体が「孝」となる。その孝によって、死後の安心を得ることができるので、子どもは自己の死の恐怖や不安を解消してくれるものである。子の肉体こそ自分の血を分け与えたものであるから、子の存在は自己の存在の証となる。こうして子孫の断絶は最大の不幸であり、そのため、いたるところに子授けの神があった。⁴

成長を始めた子どもは3才が節目となる、中国では「三歳到老」というが、これは「三つ子の魂、百まで」と同じである。清末に科挙制度を廃止して近代教育が始まったが、当時の学堂の初等教育の就学率は2%にすぎなかった。子どもにとっても大きな社会変動であるこの時期に、魯迅は次のように言っている。「子どもは完全な個人であって、彼自身の内と外との生活を持っています。したがって、子どもを縮小した成人と誤認する考え方には反対です。」父親の問題を論じて、彼は言う。

「われわれは今日どのようにして父親になるか。中国では親権が重く、父権が更に重い。このような家父長制のもとでは子どもは独立した人格はなく、父は子どもに対して絶対的権力と威厳を持っており、父親の言うことは何もかも正しい。息子の言うことは言わぬ先から、すでに間違っている」。このような儒教的父子観を魯迅は社会の進歩の弊害だと批判し、新しい父親の義務として3つの条件をあげた。第1に子どもを理解すること、第2に子どもを指導すること、第3に子どもを開放す

ることである。⁵

しかし、子どもは農村では早くから大人と同じように厳しい労働に従事しており、その改善は戦後を待たねばならなかった。更に現在では近代化を進めるために受験中心の教育体制が、子どもの周りに新しい問題を引き起こしている。

中国の教科書では、理想的な子ども像として「善行」と「合理性」をあげている。これを支えるのが集中力であり、徹底的に物事を行うことである。少年先鋒隊に入り、「紅領巾」をつけるのは良い子のシンボルである。規則を守り、我が身をかえりみず人を助け、誠実であることが良い子とされる。また敬老、親孝行に重要な価値がおかれ、子どもは家庭と社会に奉仕をすることを求められている。ここには、伝統的な儒教的思想が存在するように思える。⁶

昔の中国は日本と同じように、飢饉のときなど、父や母が生きるために、子どもが犠牲になることがあった。子どもはまた産めばよい。このような話は昔はたくさんあった。先生、年上、上司などは絶対であり、それに従うことが重要な価値となった。

一人子政策は「小皇帝」のようなわがままな子が多くなるという点では評判が悪いが、中国の子どもにとっては、今までのどの時代よりも幸福ではないだろうか。人口政策は難しく、今まで人口を政策的に減らすことに成功した国は存在しない。4億人の子どもを抱える中国では1人子政策が成功しても、実際に人口が減り始めるのは少し先の話である。また1人子政策は農村部は適用されず、中国では結婚したら、100%の人が子どもを望む。80%の人しか子どもは産まないという米国とは異なり、人口圧力は強い。アジアで産児制限に成功した韓国やシンガポールは、すべて経済的に豊かになったからで、女性の地位向上と経済的な豊かさを実現すれば人口は自然と減ってくる。その結果、ヨーロッパは人口減に悩んでいる。子どもを持つことはこのような状況では人生の一つの選択肢にしか過ぎない。子どもを持つことは金と労力がかかりすぎると思う人は子どもをつくらない。反対に貧しい人にとっては、子どもは現在のそして老後の生活の保証である。

1992年の小学生の生活の国際比較調査によると、ハルビン（中国）では親が自分のことを心配してくれていると思う割合、自分のわがままを聞いてくれると答えた率、は欧米・日本と比較して最高である。両親に対する評価も東京に比べるとかなり高い。友達関係で、自分は受け入れられてないと感じるのは東京の子である。

ハルビンでは安定した友人関係がある。東京では家の手伝いを女子にまかせてしまい、男子はあまりしない。将来の結婚観も、結婚したら仕事を辞めるというように、東京では保守的である。ハルビンでは80%が続けるという。学校に関して、朝行きたくないという子は西欧文化圏に多く、ハルビンは少ない。自己像は東京は暗く、ハルビンは「正直、親切、よく働く」である。幸福感は西欧に少なくアジアに多い。成績の良い子に将来就きたい仕事を聞くと、裁判官、医師、技師、芸術家、大学教授の順となる（ハルビン）。最後に成長欲求で、早く大人になりたいはハルビン（82%）が最高、子どものままでいたいのは欧米が高い。⁷

4、ウイグル

ウイグルの成長の民俗理論：子どもは段階を追って成長するというのは普遍的なことではなく、文化と時代によって変化する。文化はそれぞれに成長理論を持つ。新疆ウイグル自治区のタリム盆地には次のような民話がある。パーディシャー（君主）は愚かな息子を持っていたが、賢い娘と結婚させれば国をうまく治めていくだろうと考え、賢い娘を探しに行かせた。娘は王が出した謎「10才の子やぎと20才のおおかみと30才のきつねと40さいのとらと50さいの雄羊と60さいのらくだを連れて来い」に対して、次のようにいった。「10才のこやぎというのは人間の子どものことよ。子どもは10才になると、やぎの子どものように飛び跳ねたり遊んだりするでしょう。20才のおおかみは20才の男の子のことよ。おおかみみたいだから。30才のきつねは分別が出来上がってきつねのようになんでも知っている。40才のトラは顔が似てくるから。50才の雄羊は体が動かなくなって、前向きに生きようとしなくなるもの。60才のらくだは引っ張っていてももらわなといけなくなるものね。」⁸ このように人間の成長を動物の特徴にたとえている。単純ではあるが人間の成長に関するウイグルの民俗理論がここに見られる。

ホータンの校長先生は言う、「マドニヤート（文化）はウイグル文字の32文字が書けること。他に食物文化、生活文化、環境文化、礼儀文化などがある。文化がウルパアデット（習慣）より上位にある。習慣は祖先から引き継いだもの。習慣から文化が生まれる。伝統文化は習慣により発達した。子どもは大人を尊敬し、大人は子どもを可愛がる。それは習慣であり文化である。」このように文化の観念が習慣というものと強い結びつきを持っている。「大人と子どもを区別するものは年齢

とビレム（知識）である。年上の人は尊敬され、子どもは両親が座るまで食事をしない。大人になるとは結婚して、独立して、仕事を持つこと。年寄りは一カラム・シップアダム（年を取って、生活の知識、経験がある）といわれる。」

「一才半か2才までボワック（赤ちゃん）、割礼しても12才まではバラ（子ども）、思春期に入り声変わりをした男はジゲット、初潮があった女はキズ、25才から上はアダム（人）、幹部は65才で定年となる。」（カシュガル郊外の農村）

「排便のしつけは歩けるようになると自分でさせる。2才まで授乳する、その後は大人と同じ食事。6才まで一緒に寝る。学校に行き始めると、下の子どもの世話をする。成績がよければ大学までやりたい。自分の老後の世話は子どもに見てもらいたい。」「4人の副郷長の1人は2年前から女性が担当、一応選挙だがすでに決まっていて、形式だけの選挙。役割は医療衛生、教育、3つの大隊（村）を担当。郷の病院は医者が8人、看護人9人、各村には防疫站（保健員）が1人、ほとんど西洋医、仕事は子どもの予防注射、子どもの病気は、甲状腺肥大、小児麻痺、カタレプシーなどが多い。授乳は1日3回と決めてることが多い」（ホータンの農村）

イスラム社会の伝統的なしつけ：伝統的にはウイグルの子どもは家族、親族、共同体に包まれていた。結婚して子どもを作ることは当然である。ハディースは言う「人が子を成したら、信仰の勤めの半分を満たしたことになる」イスラムでは子どもは経済的、政治的なものだけではなく宗教的な意味も持っている。親族組織は父系的な特徴を持つので男性子が尊ばれるが、イスラムは女性を財産ではなく人間として扱う、女子の嬰兒殺し、遺棄を廃止させる、女子にも男子の半分であるが相続権を認める、というように習慣を変えた。イスラムの育児の教えは「子どもを大切に可愛がれ。自尊心を持つように扱え。食べ物を与える前に作法を教えることが大事である」赤ちゃんに対する過剰なほどの愛情表現がある。ムハマッドは言う「最初の7年はやさしく、その後の7年は厳しく」実際には4、5才でしつけは始まっている。少女は下のきょうだいの世話を、少年は農村では家畜の世話、町では家族の手伝いを期待されている。

社会規範についての社会化は子どもが他人を意識する頃から始まる。食物、宗教、親族を尊重する、客を歓迎する、父を尊敬することなどが教えられる。特に客の接待のとき、客の前に食べてはいけない。親族の名前と関係をおぼえる。子どもの教育の目的は理性を持たせることである。体罰はコーランでは認められていないが、

多くの親は「むちをおしむと子どもはだめになる。可愛い子には旅をさせよ」と考えている。命名式の後には、割礼がある。これは特にコーランに書かれていないが、赤ん坊に別れを告げ、少年として社会に認められる儀式である。

一般的に子ども時代を特別な時期として認めていない。大人の間からはむだな時間である。思春期もほとんど意識されていない。子ども時代が終わるとすぐ結婚となる。大人とは結婚して子どもを持つことである。結婚式は子どもの社会化の場である。家族の名誉が試される場でもある。道徳性、勇気、宗教性、歓待に関する評判が名誉である。少年はこのすべての名誉を守るようにしつけられる。⁹

以上のことはイスラム社会の伝統的な文化的規範であり、現在のウイグルには必ずしも適合しない点もある。

出産儀礼：ウイグルでは人生を区切る儀礼で火がよく使われる。これはジン(悪霊)を追い払うためである。この習慣はシャマニズムに由来するといわれている。ブシュク・トイと呼ばれる新生児を生後40日で幼児用の寝台に寝かせる儀式、ブシュクとはその寝台のことであり、トイは儀式の意味である。イスラムのムラー(宗教的指導者)が赤ちゃんの上で火を揺らし、ジンを払う。ある人はジンを払うためにウイグル・ナイフを寝台に置く。初産の多くは親の家に1ヶ月前に戻って行われる。生まれたら家の戸に赤い布をはるが、それは幸福を知らせるとともに、母親が40日間、他人の訪問を断る知らせでもある。

両親は後産を家の土壁に埋める、それは子どもには場所を教えない。下に埋めると子どもはいつもうつむくだろうし、高いところに置くともいつも上ばかり向くとトルファンでは信じられている。だから目の高さに埋めるのである。漢人はこのような後産の習慣をもたないと思う。かれらはそれは薬と考えるからである。

クチャでは後産は家の戸の内側に埋める。子どもがいつも家族とともにあることを信じるのである。マフムド・カシュガリの「トルコ語大事典」には次のように書かれてある。「後産は子宮で子の生涯の友のようなものである。女性は後産から吉兆を得る、それに祈れば子を授かる。特に息子を授かる」

新疆では乳児の死亡率が高い。生後1年での下痢による脱水症状で亡くなることが多い。各村には6ヶ月の近代医学の訓練を受けたヘルスケアのスタッフがいる。

1989年から計画出産の政策がとられ、少数民族では農村部で3人、都市部では2人と決められた。しかし、政策についての理解が十分でなく、3人の娘がいる

ところは息子がほしいからあと一人子どもを作っても良い、と考える人もいる。3人を超えたら1000元、2000元、5人目の子には6000元という高額の罰金が課せられるが、課せられた人を聞いたことがない。¹⁰

「結婚後3年間は子どもをつくらない。避妊の薬は政府が配るが、体が悪くなりそう。出産はトータニセ（産婆）が来て自分の家です。40才すぎて仲の良い人なら誰でも産婆になれる。母親でもよい。産後40日は動かない。離乳は1才半か2才でこの時期までが赤ちゃんである」（カシュガルの農村）

ウイグルの親族関係は、トルファンではぶどうの収穫のとき、姻戚関係で労働相互援助がある。結婚は同じ村、同じオアシスで行われることが多い。子どもは少なくとも2人の娘と多くの息子という家族が好まれる。少なくとも2人の娘というのは、女の子同士互いに秘密を打ち明ける相手ができるからである。一人娘は家族の事柄に干渉する男まさりに育つ。また一人娘が離婚すると、一緒に暮らす人がいない。2人以上の娘が求められるのは、それによって夫同士の関係、義理の兄弟の関係（バジャ）ができ、経済的協同によって2つの家族を結び付けられる。このように水平的な兄弟姉妹関係が強調される。¹¹

行政・生産・労働：行政組織は地区一県・市一郷・鎮一村一居民委員会、農村は郷に人民政府がおかれている。党委員会もおかれ、こちらが実権を握る。郷は以前は人民公社であり、村が生産大隊、居民委員会が生産小隊であった、伝統的にはマーラといわれる共同体の最小地域単位でもある。戸数は50－60戸、350－250人である。5人家族の場合は国から10ムーの土地が貸し出される。しかし、水が地下水のため1ムー分しか分配されないから、不足分は他の小隊から分けてもらう。この水利が小隊長の主な仕事である。「4月に綿の種をまく、6月は小麦の収穫、トウモロコシの種まき、9月は綿とトウモロコシの収穫、10月は小麦の種まき。綿は収穫したらすぐに綿工場へ、小麦は保存したり、国の食料会社へ売る、トウモロコシは自家消費。今年は雨が多かったので小麦の収穫が少ない。小麦1袋（100kg）が6袋。普通は20袋とれる。年によって値段は違うが1袋が180元から220元。綿は4ムーに畑で300kg、3000元から4000元になる。収穫のときは忙しいから夫婦双方の兄弟に手伝ってもらう。」（カシュガルの農村）

ウルムチでは、住宅が狭いこともありほとんど夫婦家族である。子どもを出身オ

アシスの親に5才まで預ける。中央アジアでは最初の子を父方の祖父に尊敬を込めて養子に出す習慣があった。これによって祖父がいつまでも若さを保つことができ、実の父は「兄」と呼ばれた。¹²

割礼・学校：伝統的にはカシュガルでは男子が生まれると宴会をするが女子はしない。40日目に命名式をする。4、5才のときムラーのところで勉強し、それを終わると男子は商業の徒弟奉公に行く。スンナットイとよばれる割礼は7才頃行われる。痛みを伴う身体変工であるから、かなり強く記憶に残るであろう。これは成人儀礼ではないが、漢人に囲まれた新疆ではイスラムのアイデンティティとなっている。

「割礼は今は病院でもらい。家で祝う。牛か羊を1頭料理する。近所や親戚など300人位集まる。割礼したら15日間動かないようにしてスープなどで栄養をとる。昔は割礼の専門家がきて、タマリスクという木の枝で性器を挟み、包皮を伸ばして輪切りに切った。綿の灰で消毒し、ガーゼで巻いた。専門家には10-15元払った。泣きわめかないように卵を口に入れる。切った包皮は家の隅に埋める。」（カシュガルの農村）

育児様式はゆりかごのようなベッドにくくりつけて、排泄も自分でやらせる。これによれば自立性が幼少のころから養われていたようである。イスラムは教育を重視していたから、昔は各村に一つはイスラム学校があった。近代的な内容ではなかったが生活に密着した知識、イスラムの作法、人生の知恵などを教えていた。ただし、コーランの暗唱でアラビア語でもあったから、文字の読み書きは教えていなかった。非識字率は1982年でウイグル45%、中国全体32%、1990年で各27%と、22%である。

ホータンの農村部の中学では、30才以下の先生が半数を占め、経験のある教師が少ないようである。中退率は2-3%で、経済的問題、病気、親が亡くなるなどが原因。ここ2、3年家出が目立つ、ホータン市内、ウルムチから仕事をしているという便りが届く。原因は親との仲が悪い、自分がわがままということもあるが、片親、親の一方が継親、仲介する祖父母がいない、しかられると自分を好きな人は誰もいないと思って家出する。

北京のウイグル人居住区の話であるが、ここでは仕事が忙しくて学校に行かずに12、3才の子はすでに学校に行く気はなくなっている。父親が出かけているとき、

10才の子どもが父親の代理で客からお金を受け取っていた。「もう学校には行かない、新疆にいたときに1年間漢民族の学校にかよって、中国語を覚えた。父と母との通訳をやっている。将来はナンを焼く専門家になりたい。」¹³ 高等教育を受けるには、金も要るし、漢語も習得しないとイケない。だが、たとえ大学を卒業しても望みどおりの職業に就ける保証はない。農業は金にならない。他の職業に早くから就いて、手に職を持っていた方がよいと考えるのは当然であろう。

ジェンダー：昔は子どもの皮膚病、寄生虫病が多かった。毎年身体検査をする。髪、爪、服装など定期的に検査をする。長髪や髪を染めるのは禁止。手に刺青するのもだめ。違反したら両親に知らせる。学校では男女は区別しない。女らしく育てるといような教育もしない。しかし、休み時間など男女は別れて遊んでいる。民族の踊りや歌の時に男女一緒に行く。男子は恐れずに何でもやる。女子は親切、大人を尊敬する、きれいにしている、勉強をする、両親や先生の話しを良く聞く。農村部では父権的などところがあるが、都市部では平等である。女子のほうが成績がよい。選ぶ職業は女子は看護婦、教師、映画スター、男は運転手、教師、エンジニア、軍隊など。（ホータン市内の小学校）

最近変わってきたことは女の子の成績がよくなってきた、女の子は人の言うことをよく聞くし、家事労働からも自由になってきたからである。（ホータンの農村）

6、7才頃から男女別で遊ぶ、女の子はゴム跳び、男の子はぶち独楽、めんこなどで遊び、そしてよく大人の手伝いをする。

結婚：カシュガルの農村、Cさんの例（28才）、この村で生まれた、15才で結婚、主人は母方のいとこである。いとこだと自分の面倒を見てくれるからと、祖母がこの結婚をすすめた、(祖母にとっては自分の孫同士が結婚したことになる)。結婚を決めてから1年後に式を挙げた。式はモスクに行く金曜、バザールの日曜は避ける。式の1週間前に男性が女性の側に洋服や生地を送る、女性側は羊などをさばいて食事の用意をして待つ、結納のような儀式である。結婚式の準備のため、米、羊、にんじん、油、柴などを女性の家に持っていく。式の当日は男性、女性それぞれの家で人を集め、食事、踊りなど祝いをする。午後4時ごろ、男性が女性を迎えに行く。以前は馬車で行っていたが、今は乗用車で、それも良い車でないと、嫁を渡さないという。イスラムのムラーがきて コーランを読み、結婚の承認を行い、ナンを塩水につけて、新郎新婦の口に入れる。

出産は10人に1人が病院でするだけ、ほとんどが家でする。

葬式（ナゼル）：亡くなったら、まず親戚に連絡。ナン、お茶、ポロなどを準備する。女性の場合はブウィーという宗教者（女性のシャーマン）が体を洗い、白布で体を巻く。男性の場合はムラーなどが行う。次にモスクへ運び、墓に埋める。顔は西、メッカに向ける。故人の貸借を清算する。男性は金曜日、女性はコルバンの時に墓参りに行く。

カシュガルの農村で墓を作っていた墓守（60）に話を聞く。都会では土地がないから一族の墓を何回も使う、前の人の骨が残っていたら取り出して、その後に入れる。農村では個人別に作る、子どもだったら親の墓に入れても良い。父の墓には息子、母の墓には娘を入れる。男性の墓と女性の墓は形が少し違う。墓には何も書かれていない、近頃、日付、名前を入れる人がいる。墓を作る費用を聞いても、それは遺族の気持ちだからとって、はっきりと答えなかった。自分は主な収入は農業から得ているから。墓守の仕事をしているから村の共同作業には出なくてよい。亡くなった人は親、親戚の近くに埋める。長生きの人は深く、広く掘る。

ウイグルの末子相続：末子相続について意識的に聞き取りをしたわけではないので、数量的な結果はない。末子相続の既存の研究では、ウイグルに末子相続の慣習があってもおかしくはない。しかし、ウイグルの相続についての文献の中には末子相続は出てこない。戦前はイスラム法により、娘は息子の2分の1、妻は4分の1とされていた。戦後は中国の法制下に入り、均分相続である。ただし、日本の家のように長男が相続するとの規定もない。家族形態は封建家長制の大家族の説と、既婚の子女は分居していくから大家族はまれであるとの説がある。これは地域による違い、戦前は地主などの階層社会だったから階層による違い、などによるものかもしれない。

末子相続の習慣は北東アジア、南アジア、ヨーロッパなど広く分布している。日本でも西南日本に多いとされている。モンテスキューの「法の精神」に次のように書かれてある。「タルタル人の間では、相続人となるのはつねに末の男子である。それは上の男子たちは、牧人生活を営みうるようになるにしたがって、一定数の家畜をもらって家から出て、新しく住居を構える。父とともに残る末っ子の男子が、父の本来の相続者である。」このタルタル人とは中央アジアのトルコ系諸民族をさすと思われる。¹⁴

このような相続慣行が存在する基盤としては日本では、地主小作の同族結合より、同等の家の結合である講組結合の村落に多く見られる。多くの労働力を必要とする水田より畑作の村に多い。直系家族より、核家族に多い。また耕地が狭く、生産力も低い、だから多くの家族成員を抱えきれない。¹⁵

これをウイグルに関して考えてみると、戦前のウイグルは封建地主制ということになっている。村の周りは砂漠であり、水の問題もあって、広大な農地があったわけではない。

カシュガルの農村に住む88才（夫）と82才（妻）。4人の息子と1人の娘、娘はカシュガル市内にいる、息子はすべて近くに住む。隣りに住む末息子（裏木戸でつながっている）に世話をしてもらっている。食事は別のこともある。

ホータンの農村でKさん（78）は結婚とともに近くに分居し、現在は次男（男の末子）に面倒を見てもらっている。結婚後15年子どもがなかったので、離婚して、40才で再婚、10人産まれて2人は亡くなった。耕地は2人の息子の分も含めて10ムー所有している。結婚後も一緒に耕作して、収穫の時、分配する。

郷で一番の金持ち（45）、奥さんは2番目、長女は中学の先生、次女は小学6年生、長男は医者、次男は師範学校、3男は衛生学校に行っている。この末息子に家を継がせる。土地は800ムー、20人を雇用、食事付で400－600元払っている。病院、学校などを作って寄付した。ポプラの苗を作り、国の植林政策に乗り成功した。

ウイグルでは家を代々存続させるという意識もないし、祖先崇拜もない。しかし、年長者に対する尊敬、年寄りを敬う習慣はある。

6、おわりに

ウイグルの子どもやライフサイクルに関しては資料が十分ではない。今回の調査は南疆の農村部で、子どもたちはどこでも元気がよかった。はっきりと将来やりたい仕事を答えてくれた。成績が良く、少し恥ずかしがり屋のカシュガルの少年はカードル（幹部）と答えた。いまだに幹部という言葉が私には判然としないが、いかにも社会主義国を感じさせる。残念ながら農村なのに農業を継ぐという答えはほとんどなかった。農村の低所得の上に都会の繁栄があるという構図が原因しているであろう。

日本に比べれば貧困は歴然としている。新疆の中でもホータンやカシュガルは貧しいところである。しかし、低所得がそのまま貧困ではないし、貧しさが大人の悩みであっても、子どもは明るい。ただし、貧困のゆえに学校に行けないとなると、それは現実的になる。成長するにつれて、社会の矛盾が自分に迫ってくる。中国という国家の中のウイグル人とは何かを考えないといけないときがくるのかもしれない。

老後を家族や親族で面倒を見ることは、いまだに自然なことである。ウイグルには1956年に制定された「五保制度」（働く力がなく、身寄りのない人に対して衣・食・燃料・教育・葬儀の5項目を保障する）があり、「敬老院」で暮らせるようになっている。ホータンのライカ郷の敬老院を訪れた時、葡萄棚のある煉瓦造りのきれいな施設で、あいにくほとんどの人は畑に行って留守であった。ここは篤志家によって建設されたということである。ウイグルではまだ差し迫って福祉を考える必要はないようであるが、福祉の対象となる「孤老」は増えている（保障を受けている孤老は1993年、10991人から1996年、15589人に増加：1997版、新疆年鑑）。

ウイグルは開放経済以来、急激な近代化の波を受けている。それは「漢文化」の波でもある。中国の中の少数民族としてどのようにウイグルの文化を形成し、民族として自律性を創造していくかが問題である。ウイグル文化といっても、シャーマニズム、イスラム、そして近代化と複雑な要素がからみ、それはウイグル人の一生を彩る儀礼にも表れていた。そして、「漢文化」に対抗して、タリム盆地で生じたすべての歴史的事象をウイグル文化として読み直す試みも始まっており、ウイグル文化は新しい動きを見せている。

[注]

¹大田素子、1990、少子化傾向と子育て—近世日本、「叢書〈産む・育てる・教える〉1」、藤原書店、p. 20.

²箕浦康子、1996、越境者と学校文化、「現代社会学講座12」、岩波書店、pp. 120—121.

³ユニセフ、1996年度世界子供白書。

-
- ⁴加地伸行、1993、旧中国における子ども、「世界子どもの歴史9」、ぎょうせい、
pp. 2-13.
- ⁵河田悌一、1993、近代中国における子ども、「世界子どもの歴史9」、ぎょうせい、
pp. 167-168.
- ⁶インターネット、1997、上村ゆう美、教科書が求める子供像、
- ⁷インターネット、1997、モノグラフ・小学生ナウ、国際比較調査「都市社会の子ども
たち」CRN
- ⁸小澤俊夫編、1990、シルクロードの民話・タリム盆地、ぎょうせい、pp. 141-
143.
- ⁹ E.W.Fernea, 1995, *Childhood in the Muslim Middle East*, E.W.Fernea(ed)
“Children in the Muslim Middle East” University of Texas Press, pp.3-11,
- ¹⁰ J.J.Rudelson, 1997, *Oasis identities: Uyghur nationalism along China’s silk
road*, Columbia University Press. pp.82-84.
- ¹¹ *ibid*, pp.108-109.
- ¹² *ibid*, p.127.
- ¹³ 李天国、1996、北京の新疆村、ハーベスト社、p.156.
- ¹⁴ 内藤莞爾、1967、末子相続の研究、弘文堂、p. 21.
- ¹⁵ 同上、pp.210-217.